

Title	バビロニアの洪水傳説とギルガミシュの史詩
Sub Title	
Author	森, 馨(Mori, Kaoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.139(311)- 154(326)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バビロニヤの洪水傳説 とギルガミシュの史詩

十一、ギルガミシュの史詩

エルクの王ギルガミシュの生涯、功業及び巡歴の物語は、「十二の土版」に満たされ、それは第一土版の最初の三語を採つて *Sha Nagbu Inuru* 即ち『總の事を見し者』の篇と呼ばれてゐる。ギルガミシュ在位の正確なる年代は知ることが得ないが、彼がセム族のメソポタミヤ征服前に、エルクに住み且つ統治したことは疑はれないところである。ニフェール出土の土版によれば、彼はエルクに於けるスメル人の第五代の治者であり、百二十六年間位にあり、その名は『火の神は支配者なり』といふ意味であると謂はれてゐる。(2) この史詩に對する主要なる典據を爲すものは古のニネヴェに於ける

ネボの文庫、及びアシル・バニ・バルの王宮文庫の遺蹟に發見せられ、現在大英博物館に保存せられてゐる數多き土版の破片である。(3) 「十二土版」の内容を略記すれば次の如くである。

(1) *Gilgamesh* の名は從來 “*Izdubar*,” “*Gizdubar*,” or “*Gis-hudubar*” と讀まれたものである。

(2) Langdon, *Epic of Gilgamesh*, pp. 207, 208.

(3) 此の破片の大部分は整理せられて Haupt, *Das Babylonische Nimrodos*, Leipzig 1884 and 1891. に發表せられた。又 *Beiträge zur Assyriologie*, vol. I, p. 49 ff. の二土版に關する氏の論文を参照せよ。

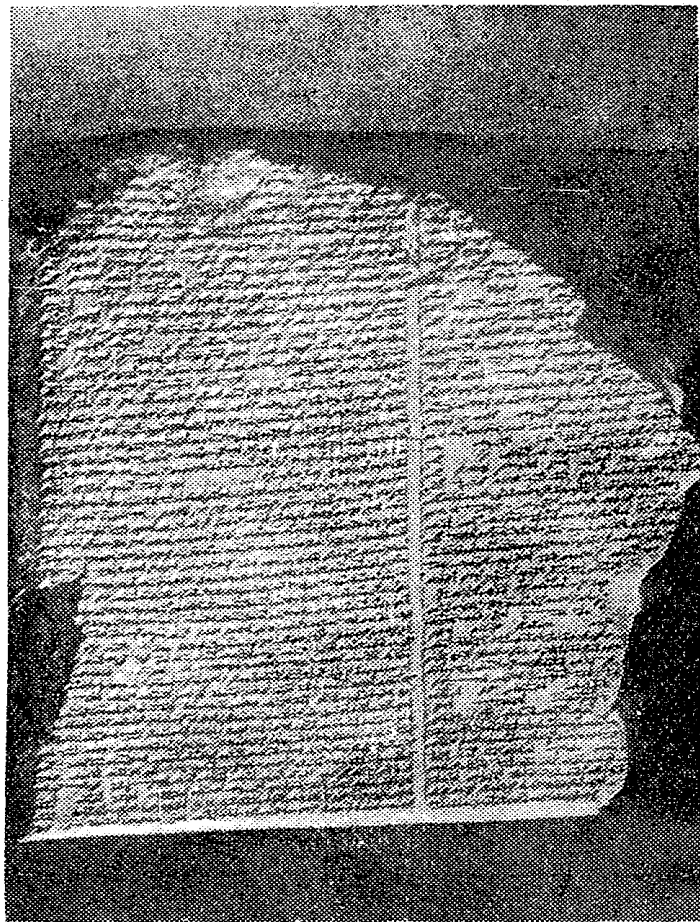
第一土版

第一の土版は、總の物をみ、總の物を學び、總の物を解し、隠されし智慧の神祕を底の底まで説

き示し、且つ大洪水前に起りしあらゆる事件の歴史を知れるギルガミシュの廣汎な知識、深奥な睿智を述ぶることを以てその行を起してゐる。彼は遠く海陸を巡行し、偉大な事績を行ひ、而して石の版に、その爲せる

々に哀訴し、彼を抑制して、その壓迫を免かれしむる他の王を創らんことを懇願するまでとなつた。神々はエレクの人の訴を聞き、女神アルルに命じて、ギルガミシュに拮抗する者を作らしめんとし

所、惱みし所の一切の記事を刻んだ。彼はエレクの城壁を設け、エ・アンナの聖堂を建立し、その外大建築を完成した。彼は半ば神性を有し、その肉體は「神の肉」より成り、「彼の三分二は神、三分一は人であつた。」(五十一行)その性格について



「洪水傳説」の土版
 ギルガミシュ史詩を刻せる、第十一土版
 俗に「パヒロニヤの洪水傳説」と稱するものは是である。(大英博物館所藏)

た。女神はその命を奉じ、その創らんとする態様を考案したる後、その手を洗ひ、一塊の粘土を取つて之に唾し、神アヌに似たる男性の生物を作つた。その身體は隈なく毛を以て被はれ、その頭髮は女子のそれの如

の記述は存しない。彼はエレクの牧者(即ち王)として人々に過度の勞役を課し、その慾求は彼等を驅つて悲慘な状態に至らしめ、遂に人民をして神

くに長く、その衣は草木の女神ギラ(即ちスムガシンの)裝束の如くに装ほひ、木葉の衣服を纏へる如くに見へた。總の點に於いて彼はこの國の人々と異なり、その名はエンキヅ(エアバニ)であつた。

彼は丘上の森に棲み、羚羊の様に草を食ひ、野生の畜類と共に水を飲み、野獸の群と共に養はれた。その身體は魁偉、その力量は他に之を凌ぐものなく、住まへる森の總の動物を完全に支配した。

ある日、獵師が罾をかけに行き、陷阱を掘り、網を張つて、常の如く獲物をとる準備をした。然し、この後三日といふものは、彼はその罾が埋められ、網が破られてゐるのを見るのみであつたが、遂に彼は網にかゝつた獸をエンキヅが逃してゐるのを發見した。彼はエンキヅを見て戦慄し、急ぎ家に歸り、そのありし次第を父に語りその驚愕を打明けた。かくして彼は父に教へられて、エレクに行き、ギルガミシュにこの顛末を報告した。ギルガミシュは彼の話を聞き、彼は獵師の父が既に思ひ浮んでゐた考案に基いて行動せんことを教えた。それは娼婦を傭ひ、之を森に赴かしめ、その美貌によつてエンキヅを籠絡せしめ、婦と居を定めしめる事であつた。獵師は此の勸告を容れ、且つ彼を助けてエンキヅを森から誘ひ出し、斯くて彼に住居を得さすべし娼婦を見出し、之を伴ふてエレ

クを發し、とかくしてエンキヅの棲む森にきて野獸の水を飲みに来る所に坐して彼を待つた。

その翌日野獸の水を飲みに来たり、エンキヅも亦之等と一緒に來たれるとき、この婦は豫て獵師に授けられし計略通りのことをした。エンキヅは面被を取り除けるこの婦を見て、野獸の群を離れて婦に近づき、之と共に居り六日七晩を過した。この時期の後、彼は以前親しく共に暮してゐた野獸の許に歸つて來たが、羚羊は彼の臭を嗅ぐや忽ち飛ぶが如く馳せ去り、野生の畜類は森の中に隠れた。エンキヅは獸物が自分を捨て去つたのを見てその膝の力が抜け恥らひのために氣絶したが、正氣づくや彼は娼婦の處に歸り、婦は彼に阿諛の言を吐き、何故彼が野獸と共に曠野を彷徨ひ歩いたかと訊ね、又自分がアヌとイシュタールの住み、又偉傑ギルガミシュの君臨するエレクに彼を連れ歸らんとする希望であることを語つた。エンキヅは之を聽き入れ、遂に婦がギルガミシュの智慧、臂力、及び威力の大なることを説きし市に、婦を連れ歸り、彼をギルガミシュに引き合せる手續を取つた。

然るにギルガミシユは、エンキヅの到着前既に二つの夢の中に、彼の存在とその到来を警戒せしめられ、且つこれをその母ニンスンナに物語つた。ついで彼とエンキヅとは互に知り合ふに及んでこの二大偉傑は無二の親友となつた。

第二土版

エンキヅがエレクに來た時、當市の人々の風習は彼には全く見馴れぬことのみであつたが、この娼婦に教へられて、パンを食し、麥酒を飲み、衣服を着けることを覚え、香油を身體に塗つた。又獵具を携へて森に入り、羚羊を罫にかけ、豹を殺し、犠牲の用とすべき獸を捕獲し、巧な狩人として、又よき牧者として名聲を博した。かくして初は此の奇怪な容貌所作を好まなかつたギルガミシユも聽て彼に注意し、その後エレクの市民が彼を讚め、その強大な、精氣溢るる體軀を讚仰するに到つて、ギルガミシユは彼を友とし、彼を悦び、彼と共に遠征をなさんと計畫した。出發に先だつてギルガミシユは女神イシユカラを訪ね様と思つたがエンキヅは女神の感化がその友に思はしからぬ結

果を及さん事を慮つて、その訪問を斷念せしめんとした。然しギルガミシユは之を固く拒んだ。エンキヅは腕力を以てギルガミシユの女神訪問を阻止せんことを言明したので、爰に兩雄間に激しい争闘が起り、彼等は各、武力に訴へた。激闘の後、エンキヅはギルガミシユを壓服し、後者は明かに女神の訪問を斷念した。第二土版の正文は大に破損してゐるので、此の問題の權威者も各、の斷片を何處に當てはめれば正確なのであるかについて全く意見の一致を見ないのである。以上の詳細はフィラデルフィヤの一土版によつて記されたものである(1)。

(1) Langdon, *The Epic of Gilgamesh*, Philadelphia, 1917.

第三土版

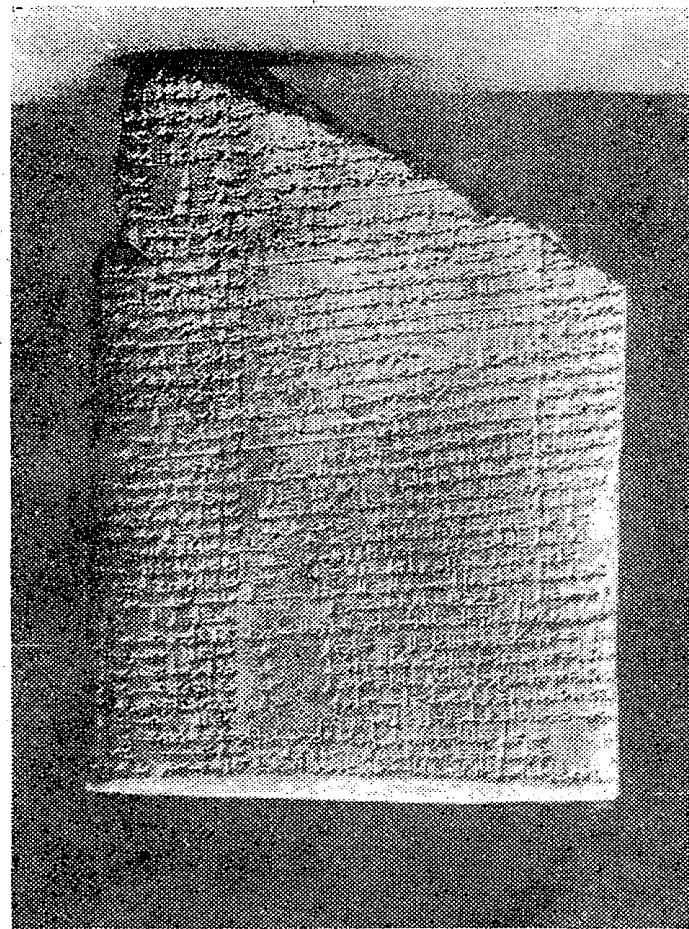
この土版の破片の正確なる順序は未だ確定しないのであるが、此の正文の最初の部分に屬する内容の中、エンキヅが娼婦と關係せしことの悲歎があつた様に思はれる。彼がエレクの市を去り、故郷の森に歸りしや否やは明かでないが、然し娼婦を呪咀する彼の聲を聞ける神シャマシユが、天より彼を呼んで云つた、「オ、エンキヅよ、何故汝

は神の家の婦を呪ふや。彼の女は汝に神ならでは
食する事を得ざる食物を與へ、王ならでは飲む事
を得ざる葡萄酒を與へ、又汝に飾るに美麗なる衣
服を以てし、高貴なるギルガミシュを汝の友とし
て交はらしめたり。

かくて今やギルガミ
シュは汝の盟友なり。

彼は汝を長榻に憩は
しめ、美しき臥戸に
寝ねしめ、王の左側
にある椅子、即ち平
和の椅子に即かしめ
たり。この世の諸王
は汝の足を吸ひ、王
はエレクの人をして
汝を慕ひ、多くの者

をして汝に願をし、汝に奉仕せしめたり。加之、
王は汝のために粗服を着け、獅子の皮衣を纏ひて
野に汝を求めたり。此等の言葉を聞いてエンキヅ
の憂慮の心は平靜に歸つた。



「創造物語」第一土版の一部
(大英博物館所藏)

エンキヅがギルガミシュに先に夢みし恐ろし
い夢を述べる破片は、恐らくこの第三土版に屬す
るものであらうと思はれる。この夢の中に、彼は
空に雷鳴、地に地震が起ると共に、恐ろしい容貌

の鷲の如き爪を有
つ一人の者が彼を
捉へて、遠く運び
去り、恐るべき女
神イルカラの暗黒
の深淵の中に押し
込められた様に思
はれた。此の深淵
の中からは一度此
處に「入りし者は
再び出づることを
得ず、此の路に旅
せし者は再び還らず。その地に棲める者は光明な
く、その地に生ける者は塵を食ひ、泥を攝り、羽
毛を以て衣とし、鳥の如き翼を有し、光を見ず夜
の闇の中に住む」のである。爰にエンキヅはその

夢の中で、世にありし間王であつた生物と、焙肉をアヌとエンリルに供し、冷き飲水を獣皮の水入より注ぎ出す陰影の如き者を見た。この「塵の家」には、高僧、司祭者、呪術者、豫言者及び神々エタナ、スムカン、地の女王エレシュ・ケガル及び地上にての人の行爲を登録するベールト・セーリが住んでゐた。

ギルガミシュは此の夢物語を聞いて、卓を出して、その上に蜜、牛酪を載せ、之をシャマシュの前に供へた。

第四 土版

ギルガミシュはかくしてエンキツに向ひ、共にニン・マクの寺院にその母の婢ニンスナに會ひ、その夢の意味を訊かんことを勧めた。二人はその所に到り、エンキツはその夢を語り、賢きこの婦は香を焚いてシャマシュに何故にこの神が彼女の子に抑へ難き不安を與へしかを問ひ、次にギルガミシュがエンキツと共に行ふに決したる猛王クンババに對する危険なる遠征を述べて、この神が彼女の子のエレクより出づることを止める様に明かに希望

した。之にも拘らずギルガミシュはクンババに向つての進軍を決心し、彼とエンキツとは一刻も躊躇せず、杉の生茂つた山に向つた。

第五 土版

聽てこの二人の英雄は杉の森に達し、杉の非常な高さと繁茂した樹葉とを畏怖の念もて眺めた。

此の杉樹はベールの特別の保護の下にあり、ベールはその聲は暴風の咆ゆる如く、その口は神の口の如く、その息吹は疾風の如き生體、クンババをその管理者に任じたのであつた。エンキツが森の深く恐しいのを見た時、彼はギルガミシュを引返さしめんと試みたが、彼のすべての願望は無駄であつた。彼等が森に這入つてクンババに迫らんとした時、エンキツは二、三の夢を見た。彼は之をギルガミシュに告げし所、ギルガミシュは之を彼等の成功の兆とクンババの滅亡の表徴であると判断した。さてこの正文は斷片となつてゐるので、此處に於て二英雄がクンババを克服するのについて如何なる手段をとつたかを正確に知ることは出來ないが、然し結局彼等はクンババを克服し、エレク

に凱旋したことは疑はれないのである。

第六 土版

エレクに歸つたギルガミシュは

一、「その鎧を洗ひ、その武器を淨め、

二、「その髪を梳きて背に垂らせり。

三、「彼は汚れし衣服を脱ぎ棄て、潔き衣服を着
けたり。

四、「彼は又「王の頭被」をつけ紐にて結び、

五、「冠を戴き、紐にて結び。

六、「この時、女神イシュタールの眼、ギルガミシュ
の美しき姿を照し「て云へり」

七、「行け、ギルガミシュよ、汝を置きて我が愛す
る者はあらず、

八、「我に汝の「愛の」果を與へよ、我に與ふべし、

九、「汝は我が男、我は汝の女なり。

一〇、「我汝の爲めに瑠璃と黄金の戦車を儀装せし
めん、

一一、「その兩輪は黄金に、その横木は寶石にて装
ふべく、

一二、「汝は日々之に強き馬をつくべし。

一三、「かくて我が家に身に杉の香氣を帯びて來
れ、

一四、「汝我が家に入る時、

一五、「玉座に坐する諸々のものをして、汝の足を
吸はしめん。

一六、「諸王、諸侯及び貴族等をして、汝の前に伏
さしめ、

一七、「且つ彼等をして山と野の諸々の幸を貢とし
て汝に捧げしめん。

一八、「汝の……と汝の羊も双子を産むべし、

一九、「荷運びの獸は貢を積みて來るべし、

二〇、「汝の戦車につくる「馬」は揚々と馳せ、

二一、「汝の許にある如き獸は他にあるまじ、」と
イシュタールの誘ひに答へて、ギルガミシュは長

い演説をし、女神の愛人となつて不幸な人々の災
禍、危難を述べてゐる。女神の愛は風や雨の吹き

込む扉の如く、内にある戦士を殺戮する保砦の如
く、又その背轎を撃ち破る象の如くである、等々、

と彼は評し、更に云ふ、「如何なる愛人を汝は永へ
に愛するや。汝の牧者等のいづれの者が榮えたる

や。來れ、我「汝と共にある」災禍を述べんと。彼は女神の青春時の愛人タムズを語る、女神は彼のために年々歎きの祭典を催してゐる。女神の配下に來つた總ての者は身體を毀たれるか、殺されるかし、鳥の翼は破られ、獅子はその身を碎かれ、馬は鞭と柏車で死へと逐ひやられる、と語り、彼はまた「汝我を愛するや、又彼等を遇せる如く我を遇せんとするや」との言葉を以て、その演説を結んだ。

此等の言葉を聞き、イシュタールは憤怒に満たされ、天に昇り、その父アヌ、母アンツに、ギルガミシユの己を呪ひその不義の行爲を全部暴露せることを訴へた。女神は繼いでアヌにギルガミシユを滅す爲に、猛き天の牡牛を創らん事を訴へ、且つこの願を聞き入れずば、種々の破壊事業を、恐くは世界に加へんと威嚇した。そこでアヌは焰を吹く(?)天の牡牛を創り、之をエレク市に送り、牡牛は多數の人々を殺した。遂にエンキヅとギルガミシユは自ら赴きて牡牛を退治せんと意を決し、彼等は牡牛の居る所に來たり、エンキヅはその尾

を捉へ、ギルガミシユはその首と角との間に激しき打撃を與へ、二人は共力して之を殺した。イシュタールは牡牛の死を聞き、忽ちエレクの外廓の胸壁に驀進して、その牡牛を殺したギルガミシユを呪つた。エンキヅはイシュタールの言葉を聞き、赴いて牡牛の肉片を其の右腹から割き取つて女神に投げつけて云つた、「我もし汝と戦ふを得ば、我汝をあしらふこと此の牡牛に對せし如くすべし。我汝の身の廻りにかれの臟腑を織りなさん。」かくてイシュタールはその寺に仕ふるすべての婦と娼婦等を集め、エンキヅの投げやりし牡牛の肉片に向つて、この婦等と共に哀歌を唱へた。

こゝにギルガミシユはエレクの職人を呼び集めた。職人等は來つてこの牡牛の角の大きさに驚き怪んだ。その角の容積は瑠璃の三十ミナに當り、その厚さは二指の長さに當り、六クルの油を入れ得るからである。ギルガミシユは此の角を神ルガルバンダの寺に持參し、その神の玉座に懸けた。かく供物を捧げて、ギルガミシユとエンキヅはエウフラテス河に到り、その手を淨め、エレクの市場に歸

つた。彼等がエレタの街路を過ぎ行く時、人々は彼等の顔を見んとその周圍に犇めき集つた。その時ギルガミシュは問ひて、

「人の中にて優れしものは誰なるや、

英雄の中にて榮光あるものは誰なるや。」

と言へるに、此の間に答へたるは宮殿の婦達であつた。叫んで曰く、

「ギルガミシュこそ人の中にて優れしものなれ、

ギルガミシュこそ英雄の中にて榮光あるものなれ。」と。

ギルガミシュは宮殿に這入つて大祝典を催す様に命じ、賓客等には夜の臥戸が彼により用意された。祝典の夜、エンキヅは夢を見、起きて之をギルガミシュに告げた。

第七 土版

第七土版の内容については相當に疑問があり、之に關する大家の意見は一致しない。正文の行の大部分は土版の初めに當つて缺けてゐるが、然しこの部分はエンキヅの夢の記述を含んでゐたことは頗るあり得ることである。その後にはギルガミ

シュ又は他の者の夢判斷が書かれてゐたものと思はれる。之が果して然るにせよ、又然らざるにせよ、この夢はエンキヅにとつて危難の前兆であつた事はかなり確かなるものの如くである。疑もなくこの土版に屬するものと思はれる一破片は、エンキヅの病患と死とを記述してゐる。この病患の原因は知る事を得ない、この斷片は彼が病床につき、その容態は益々悪くなつて十日の間床に臥し、十二日目に死したることをのみ記してゐる。彼は何かの戦争で受けし傷の爲に死んだのであるかも知れないけれども、それよりもメンポタミヤの熱病に冒されて斃れたことが、一層あり得ることである。ギルガミシュが夥多の戦争に彼の勇敢なる友にして戦友であるエンキヅの死を知らされた時、彼は之を信ずることが出来なかつた。只エンキヅは眠つてゐるに相違ないと思つたのであつたが、眞實に死が彼の盟友を運び去つたのを知つて、彼は悲しみやる方なく哀歌をなしたが、そは次の土版の正文の初をなしてゐる。

第八 土版

この哀歌にギルガミッシュはその猛き友にして、「荒野の豹」なるエンキヅを呼び、山林中の二人の狩獵、二人の天の牡牛の殺戮、杉の森に於けるクシババの征伐について語り、次いでエンキヅに問ふた。

「汝を捉へし此の眠は如何なる類のものなりや、汝空しく(?)眼を開きて、我に聽くことなし。」然しエンキヅは動かなかつた。ギルガミッシュがその胸に觸れし時その心臓は静止してゐた。そこで彼は恰もその花嫁にするかの様に、丁重にエンキヅの屍に蓋被をかけて其の側を離れ、悲歎のまゝ、に猛り狂ふ雄獅子の如く、又兒を奪はれし雌獅子の如く咆哮した。

第九 土 版

烈しい悲歎の中にギルガミッシュは、愛する戦友エンキヅの哀歌を唱へて國內を遍歴した。歩むにつけて彼は獨り思ひに沈み、

「我も亦死ぬべし、その時エンキヅの如くならざるべきか。

悲哀我が魂に入れり、

我は己を捉へし死を懼るるが故に、國中を漂へるなり。」と考へた。

死より逃れんとすることは彼の熱烈なる望であつた。彼はウバラ・ツツの子なる遠祖ウタ・ナビシュムが神性を與へられ、永生の身となりしことを想起して、その棲む所に行き彼から永生の祕法を得んと決心した。彼はウタ・ナビシュムの棲む場所を知らざりしも、其の地に到達する爲には種々の危難に相遇することをも辭せぬ決意を固めたらしく思はれる。即ち彼は云ふ、「我れ旅立ちて速に進まん。夜までに深山の谷間につきて、獅子を見、我心脅えし時は、我首を上げて、諸々の我が祈を聽き給ふ習ひなる女神シンと神々の寵を受くる大女神イシュタールに訴へん。」彼は西に向つて發足し、多くの人及び動物の危害を受けしも、之を打破つて進むうちに、遂に當時太陽の昇り且つ入る所と考へられてゐたらしいマシーの山に着いた。此の山に登る道は蠍人等(Scorpion-men)に守られてゐ、彼等の外貌は見るだに、之を見し者を恐死せしめる程の凄じさであつた。恐らく山嶽さへも

その睚視にあつては崩潰したであらう。蠍人を見たギルガミシュは恐怖に打たれて、その恐ろしさに顔色を變じた。然し彼は勇を鼓して恭しく彼等に一禮した。その時一人の蠍人はその妻に「今來し者の身體は神々の肉なるぞ」と叫んだ。「彼の三分二は神、他の一は人なり。」とその妻は應じた。かくて彼等は懇懃にギルガミシュを款待し、之に警めてその往かんとする路は危難に充つること告げた。ギルガミシュは、神々により既に神性を與へられ永生の身となりし遠祖ウタ・ナビシュテムを求め、永生の祕法を學ばんとするその意中を蠍人に明かした。蠍人は答へて言ふ、誰人と雖も未だ通過するにふた十二刻を要する、その山の暗黒地を横斷するのに成功した例がないので、彼にとつてもその國の旅行を續けるのは到底不可能である。けれどもギルガミシュは少しも躊躇の色なく、此の山を通過する路を進んだ。刻々に濃度を増す暗黒にも怖れず、彼は遮二無二山中に分け入つた。第十二刻の終には彼は輝いた日光のさす場所に着いた。彼は其處で甘美な實をつけた木の一面に繁茂した

美しい庭園に這入つて、「神々の木」を見た。

第十 土版

ギルガミシュの來たれる所には、女神シヅリ・サビツの宮殿、或は城塞があつた。彼は女神から、その旅行の上に冥伽を仰がんと、この宮殿に歩を向けた。女神は腰帶 (sash) をつけ、海の側の神座に坐してゐたが、襜褕の如く裂けた獸皮を着けた、旅塵にまみれたギルガミシュが宮殿へと近づくのを見て、好しからぬ訪客の様に思はれ、宮殿の扉を閉して彼を入れぬ様にと命じた。然しギルガミシュは女神と門外から語る事を得、何を懼れ、又何故に門を閉じたかを問ひし後、開門せずば門を破つて扉を打碎くぞと女神を嚇した。之に答へてシヅリ・サビツは彼に云ふ、

三、「汝の頬の色褪せしは何故なりや。汝の顔はうなだれ、

四、「汝の心は悲しく、汝の面貌は萎れたり。

五、「汝の心に悲しみあるは何の故ぞや。」

かくして、女神は語を繼いで、ギルガミシュが長途に旅せる人の如き面貌をしてゐること、彼が見

るも慘な様子をしてゐること、彼の顔の日焦けしてゐることをつげ、且つ終りに彼がその國より逃れ出でんとする脱走者であらうと云へるものの如くである。之に對してギルガミシユは答へて、

三〇、「いかで我が頬の色褪せ、我が顔うなだれ、

四、「我が心悲しく、吾が形衰へざらんや。」

而して後、彼は女神にその醜い様子、慘な面貌は、共に山を横切り、己を助けて杉の森にクンババを克服し、天の牡牛を殺したる「荒野の豹」といはれし親友エンキヅ、多くの獅子と闘ひて之を打殺し、その他あらゆる困難を共にせる親友エンキヅの死に運び去られしによることを告げ、且つ云ひ添へて「我は彼を抱きて六日六晩泣きて……遂に彼を埋むる事を許せり」と言ひ、更に物語を續けてギルガミシユはサビツ・シヅリに言つた。

五〇、「我痛く懼れたり……」

六一、「我死を懼れたり、されば我已が國を逃れ來れり。」

我が友の宿命、我が上に重く懸り

五二、「たれば、我國を過ぎて長き旅路を歩めり。」

六二、「いかにせば我この事につきて黙するを得るや。」

いかにせば我この「物語」を叫ぶを得るや。

六三、「愛せし我が友、塵の如くなりぬ。愛せし我が友エンキヅは誠に塵の如くなれり。」

六四、「我自らも黙して我が身を横へ、

六五、「永へに、再び起つことなかるべきか。」

六六、「ギルガミシユ「續けて」サビツに語りて「云へり」

六七、「オ、」サビツよ、ウタ・ナビシユテムへの路はいづれぞ。

六八、「そは如何なる所なりや、我に明せ。そは如何なる所なりや我に明すべし。

六九、「能ふべくんば海を超ゆべく、

七〇、「能はずば陸地を往かん。」

七一、「その時サビに答へて、ギルガミシユに云へり。」

七、「オ、ギルガミシユよ、我汝に誓ふ（その地に到る）路なし、

七、「また大昔よりその海を超ゆるを得たる者なし、

七、「偉なるシャマシユ（日神）は、その海を超へたるも、彼の他に何人かその如く爲すを得んや。

七、「路は險しく、また難し。

七、「且つその端を塞ぐ『死の海』は深し。

七、「然らば、ギルガミシユよ、汝能くその海を超ゆるや。

七、「『死の海』に着く時、汝何を爲さんとするや。」

サビツはかくてギルガミシユに、ウタ・ナビシユチムの舟人、ウル・シャナビがその所であれば、之に遇ふべき事を告げて、附加して言つた。

七、「汝能ふれば彼と共に超へ、又能はざれば歸り來れよ。」

ギルガミシユは女神の許を辭し、舟人ウル・シャナビを見出すことを得た。ウル・シャナビは彼に上

記のサビタの言葉の如き物語をし、彼も亦之に同じ事を答へて、ウタ・ナビシユチムへの路につきての教を乞ふた。ウル・シャナビは答へて、彼に斧をとり森に入り、長さ六十キュービットの數多の柱を切る様に命じた。彼は云はれた如くにし、この數々の柱を携へて歸り、ウル・シャナビと舟に乗つて、一と月と十五日の航海をし、三日目に彼等は『死の海』の『涯』に達した。ウル・シャナビはギルガミシユに此の海に指を觸れぬ様に注意した。かゝる間にウタ・ナビシユチムは舟の來るを見、その有様に若干常に異なる所あるより、岸に至りて新來者の何人なるやを見んとした。ギルガミシユを見てウタ・ナビシユチムは女神サビツやウル・シャナビが先に訊ねたる事と同じ質問をし、ギルガミシユも同じ答をして、彼の來訪の目的を語つた。彼は遠祖ウタ・ナビシユチムに會ひに行く決心をし、その爲に遠く巡歴し來り、途中多くの困難なる山嶽を超へ、海を渡つて來た事を語つた。途上彼はその汚く裂け切れ、旅塵にまみれた着衣の爲に戸口から追ひ出されたので、サビツの宮殿に入ることを得なかつ

た。又彼は幾多の鳥獸、獅子、豹、豺、羚羊、山羊等を食ひ、又その皮を衣としたのであつた。

正文の破損せる爲に、ウタ・ナビシュチュムの答の初めの行は此處に示すことを得ないが、彼はギルガミシユの兩親について語り、更に第十土版の最後の二十行に於て、彼は地上に永久なるは一つもなく、人の生死の問題は運命の配劑者マミツムとアヌンナキとの共に定めた所であつて、何人もその死する日を豫知し、或は死より逃れることの不可能なる事を戒めた。

第十一 土版

ウタ・ナビシュチュムがギルガミシユに語つた洪水の物語は既に述べたので(前號一四
三頁以下)今之を飛ばしてこの土版の殘餘の内容に移ることにする。ウタ・ナビシュチュムは洪水の物語を終り、ギルガミシユに云つた、「扱て汝自らにつきて(言はん)神々の中誰か汝を招きて、汝の求むる生命を發見せしめんと思ふべきや。されば來れ、六日七晩の間寢ぬべく汝の身を臥すること勿れ」と。然しこの訓戒にも拘らず、ギルガミシユは腰掛くるや忽ち睡魔に襲はれて深

い眠に墮ちた。ウタ・ナビシュチュムはギルガミシユの如き英雄でさへ睡魔を退くるを得なかつたの見ても、妻は困憊疲勞の極、睡に入りしギルガミシユを憐み、夫に彼を助けてその家郷に歸らしめる様に勧めた。之に答へて、ウタ・ナビシュチュムは彼のためパンを焼くべく妻に命じ、妻はその如くにし、六日間毎日パンを一塊づゝ舟に運び、之をギルガミシユの睡れる舟の甲板上に置いた。七日目に妻がパンを持ち行きし時、ウタ・ナビシュチュムはギルガミシユに手を觸れ、この英雄は驚きて目覺め、自分の睡りに敗されし事を知り、ために身動さも出來なくなつた。

死の思に惱まされ、之から逃れんとする苦慮に満されて、ギルガミシユは自ら何を爲すべきか、又その目的を果すべく何處に行くべきであるかをその宿主に質し、その指示によつて、舟人ウル・シヤナビとも相談の上、再び海を渡つて家路に向ふ用意をした。然しその家路に向ふに當つて、ウタ・ナビシュチュムは海底に生へるある植物のあることを

告げ、且つ彼をして之を得る事は永生を得るのであると信ぜしめるに至つた。爰に於てギルガミッシュは重い石を「その足に」結んで舟底の口から海中に沈み、海底に達してその植物を見、之を採取して舟に登つた。彼は之をウル・シャナビに示し、それは最も不思議なる植物で、人にその望を叶えしめるものであると説明した。その名は「シブ・イシアイル・アメル」即ち「若返り」といふのであつて、彼はその失へる青春を取戻す爲に之を食べんと欲することや、之をエレクの城市に持ち歸るべきを述べた。しかるに不幸は彼の後に付き纏ひこの植物はエレクに達しなかつた。それは彼等はエレクへの途次、池の邊を過ぎしにその水は頗る冷かで、ギルガミッシュはその中に跳び込んで水に溶した、折しも一匹の毒蛇がその植物の香によつてその所在を知り、之を呑んで了つたからである。ギルガミッシュは之を見て大聲に呪咀し、坐して泣き續けた。彼はその辛酸が無駄になり、その心血を注いだ遠征の徒勞に歸し、その爲せし事の全部が益する所なきに至つた事を歎じたる時、その涙は兩頬を滾

り流れた。彼は失望に疲勞し切つて、その友と途を急いで、遂にエレクの城市(1)に到着した。かくてギルガミッシュはウル・シャナビに命じて、城壁を躍り上つてその土臺から胸壁迄の煉瓦を調べ、之に關して彼が作つて置いた設計が、その不在中に遂行されたるやを見さしめた。

(1) エレクの市は創世紀第十章第十節に所謂「エホバの前にあつて權力ある獵夫にして、シナルの地パベル、エレク、アツカド、カルネをその國の起りとする」クシユの子、ニムロッドの建てた四市中の第二市である。スメル人ニバビロニヤ人は此の市を「ウルク・キ」呼んだ、蓋し「ウルク」は「住居」を意味し、「キ」は「國、土地」等を意味するのであり、我等は之を古代の特に下バビロニヤ地方の「人の住める國」を意味するものと認むべきである。エレクの遺蹟はよく知られ、アラビヤ人の「Warkah」又は「Al-Warkah」と呼ぶ大遺蹟の存する場所である。即ち此の地はエウフラテス河東方四哩の地であり、北緯三一度一九分、東經四五度四〇分に位する。一八四九年より同五二年にかけて、此の地に行つて發掘したるサー・ダブリユー・ケー・ロフタスの言によれば、遺蹟の大部分を包含する乾燥煉瓦の外壁は圓周五哩半の不規則圓形を形成し、處により高さは四十呎から五十呎であり厚さは約二十呎であつたらしく、城塔は半楕圓形を成し、約五十呎の間隔を保つて設けられた。その中の主要遺蹟はジグラト、即ち寺院の高塔であり、一八五〇年の發掘によれば、その高さ百呎、方二百呎であつた。ロフタスは之が蘆の莖を以つて建築されてゐる故を以て、「Bawariya」即ち「蘆の莖」と呼んだけれども、「藁の

「莖」を意味する *durtyah* なる語は波斯語であつてアラビヤ語ではなく、寧ろロフタスの呼んだこの名稱はアラビヤ語の「Bawar」即ち遺蹟又は「死所」等の語に一層近い關係を有するものゝ様である。この塔は長さ三百五十呎、幅二百七十呎の寺庭に立つてゐる。之に次ぐ大遺蹟は「Waswas」複數「Waswas」即ち「大なる石」と呼ばれるものである。この「Waswas」はロフタスとチー・ケー・リンチ氏が發見した、地より突出せる圓柱形の玄武岩をいへるものと思はれる。此の石の上には戦士の像が彫られ、石そのものは地方民の寛除させられた。この遺蹟は長二百四十六呎、幅百七十四呎、高八十呎である。その側面は種々な傾斜度を有する面を有し、只西南面のみは垂直面を爲し、一ヶ處の高さ二十三呎に及んでゐる。更に詳細を望むものは Loftus, *Chaldea and Susiana*; London, 1857, p. 159 以下を見るべきである。Warkah の遺蹟の數ヶ所は一九一四年ドイツ考古學者等によつて發掘せられ、多數の土版、遺物、「出土品」があつた由である。

第十二 土 版

第十二版の正文は非常に斷片的であつて、大なる空隙を有する。然しギルガミシュが永生の祕法を得んとする希望を棄てなかつたことは確かなものゝ如くである。彼は之を地上に見出し得なかつたので、之を死者の國に見出さんとする考を以て準備を整へた。彼の相談を受けたる僧侶は下界に入り得べき條件を説明したが、彼は命ぜられた任務を果たし得なかつたので、下界に行くことを得か

つた。次に彼は故友エンキヅと語ることを得たらば、彼よりその知らんと欲することを學び得ると考へたので、神ベールに訴へてエンキヅの魂を醒す様に頼んだが、ベールは何の返事も與へなかつた。次いで彼はシンに訴へたが、この神も亦何の答をも與へなかつた。次に彼はエアに訴へた所、この神は彼に同情を寄せて、戦の神ネルガルに命じてエンキヅの魂を喚び起さしめ、ネルガルは地に穴穿ち、この穴を通じてエンキヅの魂は「風のいぶさの如く」此の世に現れ出でた。ギルガミシュはエンキヅの魂に色々の質問を試みたるも、彼は之により極めて僅少の報道を得たのみで満足する所も乏しかつた。此の土版の最後の諸行は、埋葬されぬ人の魂は地中に安居することなく、また友なき人の魂は家々の臺所から投げ棄てられる殘物を漁りつゝ、街路を彷徨ふのである、と云ふ様に思はれる。(完)